

福井県養護教諭研究会「サポート隊」の活動

福井豪雨被災した子のケアに奔走

災害による心のダメージは大きい。そこに年齢の差がないとはいえず、成長過程にある子どもには大きな傷となる。今年の夏、鹿児島県で開かれた全国養護教諭研究大会で、福井県養護教諭研究会(会長 杉川美栄子・福井県立天野東高校養護教諭)の定永眞由養護教諭(福井県立春江工業高等学校)は2年前の福井豪雨の際、被災した子どもたちのケアに取り組んだ「養護教諭サポート隊」の活動を紹介した。「雨音を聞く」と怖がる「悲観的な話ばかりする」子どもたちに心と体の両面で支え、復興を支えた。サポート隊の活動を紹介する。

心と体の両面で

平成16年7月に福井県 会員に参加を呼び掛け、児童を中心に本の読み聞かせや折り紙をしたり、として何かできないか」活動は7月から8月の被災体験を話す子どもに復旧作業が進む中、県17日間。延べ108人のは耳を傾けるなどして市内の養護教諭334人で、会員が、福井市、美山町、り添った。健康観察も行構成する県養護教諭研究今立町内の6つの小学校い、夜眠れない児童やせんそくなどの病気が悪化した。役員らは話し合っで活動した。

「災害で命の危険を感じたり、大切なものを人は復旧作業に追われて失ったことによる心のダメージのため、学校で児童をだ。夏休みであったが、大した児童は、医者やカウンセラーなどに引き継い

メッセージは大きい。早期に預かる学童保育が開始さ対応しないとPTSDなれていた。児童の中には、の活動を組織的に行うたとも懸念される」。被災「落ち着きがない」だっの活動を見られた。県はサポート隊の存子どもの心のケアを目的と心的な影響が見られた。サポート隊はそうした在を各学校に通知。サ

継続して見守る体制つくる

サポート隊は県を通じ要請のあった学校に派遣された。対応に追われる現場ですぐに活用でき好評だったという。

「大切なことは子ども様子を継続して観察すること」。役員の1人だった定永養護教諭は話す。しかし、毎日同じメンバーを派遣するのは難しい。そこで子ども様子を「引き継ぎシート」に記録。次の隊員や被災校の教員に分かるよう、1日の活動や気になった点などを詳しくメモし継続して見守る体制を整えた。

災害時には家庭訪問などを行い子どもの現状を把握しなければならぬ。各地から感謝の手紙が寄せられ、活動が全国に広まりつつあるという。

大雨の被害に遭った長野県の研究会も福井の例を参考に活動した。大野の研究会も福井の例を参考に活動した。大野の研究会も福井の例を参考に活動した。

このほか、同研究会では、子どもたちの心状態を調べるためのチェックリ

26

ストや災害後に起こる子どもの変化と対応策を記した保健便りを作成し、データを被災校に提供した。

定永養護教諭は「子どもの心と体の両面から支援できる養護教諭の専門性を生かした活動だった」と当時を振り返る。

研究会は昨年、サポート隊の活動を検証し活動や運営方法、派遣のシステムなどを整理し報告書にまとめた。これを各都道府県や全国の養護教諭研究会などに配布した。

大野の被害に遭った長野県の研究会も福井の例を参考に活動した。大野の研究会も福井の例を参考に活動した。

このほか、同研究会では、子どもたちの心状態を調べるためのチェックリ

26

26

